

親鸞における諸行廃捨の構造

——「廃立」の語を用いない理由について——

四 夷 法 顕

はじめに

親鸞の師である法然は、選択本願論に基づく「廃立為正」をその教学的立場としている。この選択廃立義は法然の門弟達によって継承されていき、親鸞もその例外ではない。また廃立は思想形態だけでなく、用語自体も法然は勿論、門弟達にも使用されており、親鸞在世当時から法然教学を表す名目として一般的に認識されていたことがわかる。しかしその中において親鸞の著書の中には一度も廃立の語が用いられておらず、これは単なる偶然ではなく、明確な意図があったと予想されるのである。本論では、法然の廃立義を相承する親鸞が何故「廃立」の語を用いなかったのか、その意図を廃立の構造と、語義の二つの視点より検討する。

一 廃立の構造

法然の廃立義は善導の釈義に依って明かされる。『選択本

願念仏集』「二行章」の標題に「散善義」就行立信釈によつて正行を立して諸行を廃することを明かす。⁽¹⁾ また「三輩章」では、諸行と念仏との関係について廃・助・傍の三義でこれを論じ、最後に善導の付属釈を受けて、「廃立為正」として⁽²⁾いる。一方、助正・傍正の二義は「請諸学者、取捨在^レ心」とし、諸行に対して種々の見解が示される。しかし「念仏付属章」において、弥陀の本願、釈迦の付属に順じて諸行は廃捨すべきことが勧誡されている。⁽³⁾ このように、法然教学において諸行は非本願として廃捨され、称名念仏こそが本願に誓われた往生行であるとする選択廃立義が一貫して主張される。この思想は聖道諸宗からの論難の的となり、法然門下において廃捨された諸行をどう位置付けるのかは大きな教学的課題であった。⁽⁴⁾

その中で親鸞は、「顕彰隱密義」によって応えていく。即ち、法然によって選定された『浄土三部経』について、『観経』は定散二善、『小経』は自力念仏が経説の当面であるが、根

底には『大經』の他力念仏が説かれていとみた。さらに『觀經』顯説の要門と『小經』顯説の真門を、第十九願と第二十願にそれぞれ根拠付けることによつて聖道一代が從真垂仮の権仮方便法であることを論成するのであった。この権仮方便は暫用還廢という構造で、未熟の機を調育するために仏が暫く用いさせ、機根が熟し、真実の教法を受け入れることが出来る様になれば方便の教法は廢される。このように、権仮方便の教法は廢されるべくして説かれた教法であり、隱顯釈はまさしく法然の廢立義を基調として思念せられた經典解釈であることがわかる。また「念仏付属章」には、諸行と念仏が廢立されなければならないのは、定散二善の諸行は隨他意として仮に説かれた法門であり、念仏は弥陀の本願と積尊の付属による隨自意の法門であるからとしている⁽⁵⁾。即ち、法然にも諸行は念仏の方便法として廢立されるのが『觀經』所説の法義であるという理解が見られ、親鸞の隱顯釈はこれらの意を承けて諸行の位置付けを明確にし、廢立の必然性を体系化していくのであった。

ところで親鸞は、隱顯釈によつて法然の廢立義を確立させる一方で、「遇獲⁽⁶⁾三行信、遠慶⁽⁶⁾三宿縁」や三願転入の文など、大悲調育の権用を嘆ずる一面もある。この様な文は、廢捨の為に説かれた法門は単なる否定や批判に終わるものではなく、むしろその上にも用いていた仏意を見出す、内面的意義

親鸞における諸行廢捨の構造(四 夷)

を顯すものと窺わねばならない。これらのように、廢立とは二つのものを並列におき、客観的にその優劣を判じて取捨選択する構造の為、未熟のものを調機誘引せしめんとする仏意と、法然の選択廢立義の正当性を顯しきれない為に廢立の語を用いなかつたと思われる。故に親鸞において、「聖道諸教行証久廢、淨土真宗証道今盛⁽⁸⁾」等の真仮廢立を明かす文があつたとしても、単に真と仮を並べて客観的にその価値批判をするのではなく、親鸞自身が仏智を疑つていた既往の上から疑惑を誠め、方便を廢捨すべきことを勧める一面があることを忘れてはならない。

二 廢立の語義

「廢立」とは、本来天台用語に由来する。即ち、『法華玄義』に『妙法蓮華經』の經題を釈する中、蓮華に「為蓮故華」・「華開蓮現」・「華落蓮成」三種の在り方があるとす⁽⁹⁾。これらに『法華經』迹門における經法の權実を合わせれば三喻は「為実施權」・「開權顯実」・「廢權立実」の三義を表すとされている。廢立とはこのうちの「廢權立実」のことで、所対の機縁が熟し、權即実と融会されたならば一乘真実の化益のみが施され、未熟の機に施した化用は廢される。このように權用が廢され、実用のみ立せられることを廢立といい、本来天台教判において、權即実とする「開會」の構造の中で用いら

れる用語であった。したがって天台でいわれる廃立は、⁽¹⁰⁾ 積尊の化用のみが廃され、教体は本来真実であるから廃されぬ。

ところが法然は随他意を定散門、随自意を念仏門とし、両者を各別の法門とみなして行体に約して廃立する。一方、天台の廃立は権実の差別心は廃されるが行体は廃さない。このように法然における廃立義は、天台の廃立義を善導の付属積の意に依って転用したものであり、開会を表すものではない。⁽¹¹⁾

ここで注目されるのが西山派証空の廃立義である。証空は自身の教学に開会思想を取り入れ、諸行は本来弥陀法の外になく、自力の執情が除かれ、観門領解が成立すれば定散即念仏と融会される。証空も自力他力を廃立の関係で見ると、雑行として嫌われるのは行体が即念仏であることに気付かない自力心であるとしている。⁽¹²⁾ つまり、この場合自力行といっても廃すべきは自力心であり、行体そのものは名号体内の善として廃すべきではない。⁽¹³⁾ かかる立場の廃立義は開会を表し、ここに親鸞の問題意識があったと思われる。前述の如く、親鸞は諸行と念仏を廃立の関係とし、定散即念仏の如き開会の構造は取り入れていない。そのことは「行文類」一乗海積の私積においても明らかである。⁽¹⁴⁾ 私積は主に『勝鬘經』に依って造文されているが、原文とではいくつかの相違点が見られる。その中で注目すべきは、私積において『勝鬘經』の原文にある、「是故三乗即是一乗」の文が省略されていることである。

その理由を考える手掛かりとして、証空が「是故三乗即是一乗」に言及している箇所がある。

問曰。諸教習。一乗者。仏乗也。仏乗者。実相理也。実相一理。凡聖無隔。仍一乘也。今法華十方仏土中。唯有一乘法云々。勝鬘經。大乘者。即是仏乗。是故三乗即是一乗云々。此等諸經皆以実相一理云一乗。

とし、傍線部にある様に実相の一理を証する経言として『勝鬘經』の「是故三乗即是一乗」の文が示される。即ち、「是故三乗即是一乗」は天台宗における諸法実相を証する文として捉えることにより、開会を表す文としていたことがわかる。⁽¹⁶⁾ かかる点より親鸞は、天台の開会思想との混同を避ける為に経文を省略したのであった。このように、親鸞は法然と同様に諸行と念仏は行体で廃捨するため、法然教学を特徴づける名目である廃立の語を使うことによって天台の開会の構造を表す可能性がある為にその使用を避けたのであろう。

小結

以上、これまでのことをまとめると、親鸞は聖道門からの論難に対し、所廢の法門の意味づけをする必要があった。その為、廃立とは一法を廢し、他の一法を立てる取捨選択的構造であり、論難に対して諸行顯示の意義、役割を明確に顕しきれない。故に隱顯積を施し、『觀經』、『小經』所説の法義

を第十九願、第二十願の誓願海を根拠とする権方便法と位置付けることによって、法然の諸行廃捨の必然性を体系化した。その一方で親鸞には、往生決定の身にならしめられた権用を嘆ずる一面も見られる。廃捨の為に説かれた法門にもはたらく仏意を見出す時、廃立の語では深遠なる仏心を顕すことができない。

さらに廃立とは、本来天台教学で開会の構造の中で用いられる語であるため、法然と同様に諸行を行体で廃捨する親鸞において、厳然とした法然の廃立義が成立しない可能性がある。為にその使用を避けたのではないかと考えられる。

尚、親鸞が依用する天台用語のうち、開会を含むものについて、親鸞の天台教判用語の依用は、『法華経』至上教判から『大無量寿経』至上教判へと昇華するところに意図があり⁽¹⁷⁾、廃立とは趣を異にしている。即ち、廃立は大悲調育の仏意を顕しきれない上、法然教学を特徴づける名目である為、聖道諸宗及び浄土異流に法然の選択廃立義が誤謬される可能性を孕む用語でもあった。このように親鸞が「廃立」の語を用いなかったのは「深知如来矜哀、良仰師教恩厚⁽¹⁸⁾」とある如く、偏に如来の願意を顕彰し、法然の選択廃立義の正当性を主張するところにその意図があったといえよう。

- 1 『真聖全』一・九三四頁。 2 同上二・九五二頁。

親鸞における諸行廃捨の構造(四夷)

- 3 同上二・九八三頁。 4 普賢晃壽『親鸞教学論考』(永田文昌堂一九九九年)。
5 『真聖全』一・九八三頁。
6 同上二・一頁。 7 同上二・一六五頁。 8 同上二・二〇一頁。 9 『大正藏』三三・七七三頁。
10 日下大癡『台学指針』(百華苑一九三六年)。 11 梯實圓『法然教学の研究』(永田文昌堂一九八六年)。
12 『西山全』三・三五三頁。 13 梯實圓前掲書。 14 『真聖全』二・三八頁。 15 『西山全』四・二七一頁。 16 藤元雅文「一乗釈と教行信証の課題」(『親鸞教学』九八号二〇一二年)。
17 浅田正博「教行信証」における『法華経』不引の理由」(『印度学仏教学研究』第三二卷第二号一九八四年)。
18 『真聖全』二・二〇三頁。

〈キーワード〉 法然、親鸞、廃立、隠顕、開会

(龍谷大学大学院)